

『情報化社会と 神社神道』



井上順孝（いのうえ のぶたか）
昭和二十三年二月二十一日生まれ。
東京大学大学院博士課程中退。現在、
國學院大學日本文化研究所教授。専
攻、宗教学。主な著書、『教派神道
の形成』など。

石井研士（いしい けんじ）
昭和二十九年八月十三日生まれ。

東京大学大学院博士課程満期退学。
現在國學院大學助教授。専攻、宗教
学。主な著書、『銀座の神々―都市
に溶け込む宗教』、『戦後の社会変動
と神社神道』。

今井 達（いまい いたる）
昭和三十一年十一月二十二日生まれ。

埼玉大学大学院理学研究科修了の後、
國學院大學神道学専攻科修了。神道
政治連盟中央本部事務局員を経て、
神社新報編集部勤務。平成四年よ
り編集長を務める。現在、東京都墨
田区・白鬚神社権禰宜を兼務。

稲 貴夫（いな たかお）
昭和三十四年十一月十三日生まれ。

明治大学工学部卒業の後、國學院大
學神道学専攻科修了。現在、神社本
庁教学研究調査室主任。

（司 会）茂木貞純

司会 これより財団法人神道文化会の公開文化講演会、シンポジウムを始めたいと思います。開催に当たりまして、初めに当会の専務理事からごあいさつを申し上げます。

松山 皆様方、本日は大変お忙しい中をご参集戴きましてありがとうございます。

本日は神道文化会主催の「情報化社会と神社神道」と題する公開文化講演会並びにシンポジウムを開催させていただくわけでございます。まず基調講演として、國學院大學日本文化研究所教授の井上順孝先生からお話をいただきます。そしてシンポジウムはパネリストに、國學院大學助教授の石井研士先生、それから神社新報社編集長の今井達先生、神社本庁教学研究調査室主任の稲貴夫先生、そして今お話し戴きました神道文化会の常務理事でもあります、神社本庁教学研究所室長の茂木貞純先生に司会をお願いして、進めさせて戴きます。

神職の方、そして一般の方もおられると思いますが、神道文化会は昭和二十二年九月に発足しまして、昨年五十周年を迎えた財団法人でございます。戦後間もなく一般の方々への神社神道の普及を大きな目的に設立されたわけですが、以来書籍の発行や、こうした講演会を開催するという形で努力してまいっております。今日の演題は「情報化社会と神社神道」ということですが、数年前に携帯電話がはやり出したなと思っ

たら、もう若い人は全員が持っているといったようなぐあいに世の中の変化が激しくて、私どもはついていけないような気持ちです。そういった中で伝統を守らなければならない神社神道、この辺の兼ね合いがどういうふうに今日のお話の中で展開するのか、私も楽しみに聞かせていただこうというふうに思っております。どうか最後までよろしくご静聴戴きたいと思います。ありがとうございます。

茂木 専務理事さんからご紹介がありましたように、今日の進行役を務めさせて戴きます、神道文化会常務理事の茂木と申します。よろしくお願いいたします。最初に私の方から今日のこの講演会とシンポジウムの目的につきまして若干お話をさせて戴きたいと思います。

先の国会におきまして行政機関の保有します情報の公開法案が審議されまして、現在は継続審議となっておりますが、いづれ近い将来にこの情報公開法は制定されるというふうに思っています。政府は国民に政府の諸活動を説明する責務があり、従来のような閉鎖的な行政というものが許されない、そんな状況になってくるのだらうと思います。今日のこの公開講演会、またシンポジウムですけれども、情報というものがきわめて重要な意味をもつこの現代社会にありまして、神社にどういうことが要請されているか、そういうところに視点を置いて議論を展開したいというふうに思っています。

神社がそうであるかどうかわかりませんが、一般的に宗教団体というのは閉鎖的であるというふうに理解されています。また意識調査等でもそのような結果が出ています。宗教団体というのは一体何をやっているかわからないというような批判もあるわけですが、そういうようなところから平成七年の宗教法人法の改正というような形になったというふうにも思っています。神社界としては、宗教法人法については積極的に改正の立場を表明し、現在はその対応に追われているというような状況ですが、誤解のないように最初に申し上げておきたいと思いますが、今日のシンポジウムはその宗教法人法の改正に伴う情報開示の問題、あるいは政府で行おうとしています情報公開法に関連する議論ではありません。あくまでも現代のこの情報化社会の中にあって神社がどのような形で情報を伝えていけばよいのか、伝統的な神社がどのような方法でどのような情報を発信すればよいのか、理想の姿はどうあるべきなのかということを、神社界の内部あるいは外部の先生方のお話を聞きながら模索したいというふうに考えている次第ですので、よろしくご理解をいただきたいと思います。

まず最初に國學院大學日本文化研究所の教授でいらっしゃいます井上順孝先生に表題のテーマでご講演をいただきたいと思っています。その後にシンポジウムに入りたいというふうに

思っています。ご講演をいただく前に簡単に先生の略歴をご紹介したいと思います。

井上先生は昭和四十六年に東京大学をご卒業になられまして、昭和四十九年から東京大学の助手としてご勤務の後に國學院大學日本文化研究所の方に移られまして、現在、同日本文化研究所の教授でいらっしゃいます。専門の分野は宗教学です。もうすでに皆さんご承知のことですが、たくさんのご著書がございます。『教派神道の形成』、『海を渡った日本宗教』、あるいは『新宗教事典』の編集、ごく最近では神道に關係のあります日本文化研究所でつくられました『神道事典』の編集、その他たくさんのご業績があります。主として新宗教の研究がご専門だと思いますが、神社界にも非常にかかわりが深いということで、今日のテーマについて、神社界の外から見た立場からのお話がいただけるのではないかとこのように思っています。

それでは、これから約一時間にわたりまして先生にご講演をいただいて、その後少し休憩をとりまして、引き続きシンポジウム、四時ごろまでにはすべての行事を終わりたいというふうに考えていますので、よろしくお願い申し上げます。それでは井上先生、よろしくお願いいたします。

基調講演



井上 ご紹介いただきました井上です。本日の講演のタイ

トルは「情報化社会と神社神道」ということになっていきます。私は、今ご紹介がありましたように、いわば外側から神道を眺めているという立場ではありますが、実は小さいころから非常に神社神道になじみをもって育ちました。ずっ

と長く育ったところが鹿児島県の川内市というところです。

ここには、皆さんご承知と思いますが、旧国弊中社の新田神社がありまして、邇邇杵尊を祭っています。なかなか立派な神社でして、階段が三〇〇段ぐらいありまして、御祭神の御陵とお社があるという景観のところです。親が神社に非常に崇敬をもっていましたので、私は小学校のころからそこに毎週通わされました。それで小学校四年生のときには大祓詞を暗唱していました。ここを毎朝三〇〇段駆け上って祝詞を上げていた時期があります。ですから、ひよっとしたら、

そこら辺りの神職さんより真面目な神社人としての生活を送った時期があるかもしれません。ただこれは遠い昔のことです。今、今は國學院の中にある神社にも頭を下げないので、不敬なやつらということになるかもしれません。しかし、そういう意味で決して外からだけではなく、自分が小さいころもっていた神社のイメージというものと、そしていま眺めている神社の実態というものが、どういった時代の変化でこういうことになったのかということ、漠然とはありますけれども、考える機会が多いわけです。

近々宗教情報リサーチセンターを開設することになりまして、そうしたことから改めて現代社会における宗教にとっての情報ということを考えていますので、はじめにその点からのお話をしたいと思います。

我々の世代が育ったころは、神社というのはまだ少なくとも、大都会でなければ、いろんなところで地域共同体のシンボルであったと思います。お祭りのときには神職さんがお祭りをして、また地域の年中行事の際に神社に集まって何かをやるということとはごくごく普通のことでした。しかし最近では、そういうお祭りは確かに行われているのですが、だんだん距離感が遠くなっているのではないかとこのうふうに感じています。

ここに「風景としての神社」ということを書きましたけれども、これは実は借り物の言葉というか、ちょっと似たよう

な表現を借りたものです。「風景としてのお寺」という表現を非常に興味深く聞いたことがあります、それから転用したものです。「風景としてのお寺」というのは誰が言ったかという、元オウム真理教の信者で、オウムから脱会した高橋さんという人がいますが、たまたま曹洞宗の講演会で彼と一緒にいろいろ現代宗教の話をする機会がありまして、そのときに彼が自分にとってお寺は風景であったというようなことを言っていたわけです。つまり確かにお寺というものはあるのだけれども、そこから何の宗教的メッセージも受け取れない、そうした仏教のあり方が麻原の説法に引かれる背景としてあったという趣旨のことを言っていたわけです。このことを非常に重く受けとめた仏教関係者の人もいましたけれども、何となく聞き流しているお坊さんも結構いました。そうした言い方はあるいは一部神社にも当てはまるかもしれないということで、確かに風景としては見慣れているわけですけれども、それ以上の何物でもない。極端な言い方をすると、だんだんそれに近くなってきているということです。そのことを後でもう少し申し上げたいと思います。

宗教情報リサーチセンター（RIRC）について

本題にはいる前に、宗教情報リサーチセンターについてちょっと

とお話しした方が、いま私が抱いている関心を説明する参考になると思いますので、簡単にそれに触れます。

この宗教情報リサーチセンターというのは、オウム事件の後に宗教情報センターをつくった方がいいというような意見がいろいろなところから出まして、結局実を結ばなかったという経緯がありますが、それとは別の流れでできたものです。

実はオウム以前からいろいろ我々が研究し、可能性を探っていたものが、オウム事件以後各界からいろいろな要請がありまして、やや業務を拡大してオープンすることになったものです。財団法人国際宗教研究所の業務として今年の十月頃からオープンします。場所についてもいろいろ模索しまして、実は神社界にも声をかけたのですが、結局小石川の伝通院の織月会館という去年できたばかりの会館の一室を、一〇〇平米を事実上無償に近い形で利用させていただけることになりました。

なぜこんなことを考えたかと申しますと、いま宗教に関する情報が非常に乱れ飛んでおり、正確な情報が数多く流される。もちろん新聞とか雑誌に出るのは事件になったもの为中心ですから、当然のことながらおもしろそうなものとか、一目をひきそうなものもいっぱいとなり、ごくごく平均的な活動というのはあまり紹介されないということがあると思います。それが相乗効果を呼んで、うわさの上にもうわさという

ことで、偏った情報、間違った情報が広まりやすいということがあると思います。他方、本当に知らなければならぬ基本的な情報がばらばらになっているし、仮にそれを知ろうとしたときに、多くの人はアクセスの手段をみつけないわけです。業界の人たちは、それはちょっとここに電話したり、これを読めばわかるじゃないかというふうにおっしゃるわけですけれども、普通の人にとってはそういうごく当たり前の情報すらどうやって手に入れたらいいかわからない状況になっているわけです。

この間開かれた国際宗教研究所主催の宗教教団と情報化をめぐるシンポジウムの結果を、毎日新聞にちょっと皮肉っぽく書きました。フロアの人から「宗教情報について知りたいときにどうしたらいいか」という質問があったときに、ある仏教関係者の方が、各宗派はいろんな機関誌を出しているし、新聞も出ているし、本屋に行けばいっぱい本が出ている、それを読めばわかるじゃないですか、という趣旨のことを言っていたわけです。それはもう全く今の状況を把握していないわけで、授業で使う教科書ですら一般の人は見つけられないのが現状です。学生さんも「どこにあるんですか」と。生協に並んでいないともう手に入れられない。そうした状況のもとで、機関誌がありますとか、本屋さんで手に入りますというのは、今の情報の環境を全く知らない言葉であって、いかに普通の

人に知らしめるかということを考えてこなかったということが改めて浮き彫りになったエピソードなのです。

そういうこともありまして、正確な情報とか知りたい情報を何とか皆さんにデータとして提供できる場所をつくりたいということとで発足させようということになったわけです。行うことは、新聞・雑誌記事情報、学術情報の収集公開、インターネットによる教団情報の公開、ネットワークの形成ですが、こうしたことがなぜ必要かという点、いま申しましたように本場に今情報がゆがんでいるというふうに私は思うわけです。ゆがんでいるというのは、いろいろな情報、あるいは必要な情報、間違った情報の方がはるかに多くて、適切な情報は入手すら困難です。

例えばそれぞれの宗教集団がどれぐらいの規模でどんなことをやっているのかという公的な資料としては、石井さんが前にいらした文化庁宗務課で出している『宗教年鑑』が唯一です。ここには信頼できない数字ものっています。それは全くノーチェックだからです。それぞれの宗教が、うちは何人いますと報告します。三〇〇万いると言えば三〇〇万と書くわけですね、一〇万と言えば一〇万と書く。小さな家一つで一〇万いるはずがないと思って、一〇万という報告があれば一〇万と書く。そのような年鑑しかないわけですね。それをもって今の日本の宗教の状況はどうだこうだというふうに

語られているというような状況です。そうした基礎的な情報をそろえないと、もうこれだけ情報が乱れ飛んでいる中では、何が何だか話がわからなくなっていくだろうということです。以上は前置きでして、だんだん神社神道とのかかわりの話に移っていきたいと思います。

情報化社会で起こっていること

ここで情報社会で起こっていることに触れたいと思います。このことは私いろんな場所で申し上げているのですけれども、これからの宗教界にとっての情報という問題を考えるときには、その背景、社会的なインフラみたいなものを考えないと、単にコンピューターがどうのこうのとかいう話ではないわけです。当然その背後にある人の状況、知識の状況を考えなければいけない。こちらの方がむしろ重要だということです。これはいろんな問題があるのですが、今日はあえて二点に絞ってお話したいと思います。

一つは、これも繰り返し言っていることですけれども、「専門知の逆転現象」とあえて刺激的な表現をとっているのですけれども、近代化以降じわじわと進んできた教育の普及というものの、これによって戦後には、いわゆる高等教育の大衆化が生じました。これもしばしば高等教育の大衆化という

ときに言われることですけれども、戦前の大学生の数よりも戦後の大学の教員の数の方が多いと。さらに日本は大衆化の次の段階に入ろうとしていると言われています。高等教育のレベルをいうときの一つの指標としてよく「エリート／マス／ユニバーサル・アクセスモデル」という分類が使われます。高等教育がエリートのための、あるいはエリートだけが高等教育を受けるという段階が最初のステップとしますと、同世代の一五%以上が高等教育を受けるようになるとマス型です。マス型では、高等教育自体の構造にも大きな変化が生じて、やがては同年齢層の五〇%以上が何らかの高等教育機関に就学するというユニバーサル・アクセス型、だれでもの高等教育ということになる。日本はもうまさにこの最後のユニバーサル・アクセスに突入せんとする直前の段階にあるわけです。そういうふうな高等教育が進んできたということは、ごく一部の人が知識を共有している、しかも専門的なところに関しては専門家しかわからないという構造がだんだん崩れてきているわけです。いま盛んにいろんな分野で情報公開、情報公開ということが言われているわけですけれども、その背後にあることをよく考えてみると、もうそれぞれの道のプロといても、真のプロは確かにプロでしようけれども、周辺のプロはセミプロよりだめな場合が結構あるわけです。プロだからといって、専門分野についての情報を専有することも

できなくなっている。アマチュアとの差がなくなってきたというわけですね。そうしますと、一つのことに関してプロフェッショナルであるということがある意味で非常に難しくなっているわけです。

これを宗教についていいますと、ちょっと前であれば、例えばお寺のことであつたらお坊さんのほうがはるかに情報量があり、神社のことだつたら神職さんの方がよく知っているというふうに考えてよかつたと思いますが、今は必ずしもそうでないというか、そうでない状況の方がふえてきたりするわけですね。お坊さんも立派な方がいらっしゃいますけれども、学生時代からあんまり真面目でなくてよろしくない人もふえている。そういう人と、一般の自分の知的関心から仏典を学んだ人とどちらがその宗派について知っているかというのと、後者である場合が多くなったりします。神社は幸か不幸か一般の人があまり関心をもたないのですね。神社の歴史とか、その教えとか何なりということに関心をもたないからそういうことが目立っていませんが、もし神道ブームが起これたら、専門知の逆転現象は簡単に起こってしまうのではないかと。というふうには私は思っています。情報社会では多くの人が自ら情報を発信し、受信できる、そういう社会ですから、ごく一握りの人が自分たちだけに通じるような知識を専有することで社会に対して優位に立つというようなことが難しくなっ

てきていると思うのです。このことがまず宗教界にとつてはとても大事な問題だろうというふうには私は思います。意外とこれは軽く見られているような気がするのですけれども、長い目で見ると、深刻な問題になるのではないかと。いうふうに考えています。

それからもう一つの問題は、ここに「価値の相対化」ということを申しましたけれども、これは神社神道にとっては特に大事なことになると思いますけれども、伝統的なものがもつていた価値というのが今は非常に相対化されて、「伝統的であるから価値があるとか、長く続いたから価値がある」というような考え方というのは情報化社会ではどんどん後ろに下がっていくわけですね。そのメカニズムというのを説明するとちょっとややこしいことになるかもしれませんが、物よりも情報が優先していく状況ということですから、情報手段があまり発達していない社会では、やはり実際にある具体的な物、人という、そのさわることでできる皮膚感覚のようなもので確かめる度合いが非常に高いわけです。古い物と新しい物、こういうことは見てわかりますし、ずうっと昔からそこにあるような物と最近あらわれたような物との違いというのは多くの人が認識できるわけですね。ところが今は情報、しかもこれが電子化された情報などというレベルになつてくると、電子化された情報レベルでは伝統的な情報とか新しい

情報というのは皮膚感覚ではわからないのですね。端的な例でいえば、例えばインターネットでいろんなホームページにアクセスして、仮に伊勢神宮のホームページがあったとしますね。片方に去年できたばかりの宗教法人のホームページがあったとします。見る側からすると、それはどういうデザインでつくってあるかとか、どんな話があるかということと判断するわけで、そのままではストリートに一方の伊勢神宮からいろんな長い歴史を感じ取るという行動にはならないのですね。やり方次第ではなるかもしれませんが、そもそもそういうものではないということです。

つまり物は確かにある、でも電子ファイル化されたデータで管理するという発想になってしまうと、それはデータベースに存在してはじめてモノとしての存在が承認されるということになりかねないのですね。そこに載っていないと存在しないということとです。怖い話ですけれども、近未来そういう発想があるいはひょっとしたら出てくるかもしれません。極端に言えば、登録されていない人間は人間ではないみたいな、あんたIDがないから存在しないよというような事態ですね。情報化というのはそういう側面をもつわけです。

そういう価値の相対化というのは、だれもが、これはもう伝統的なものだな、あるいは日本人にとっては古く親しんだものだなという、そういう感覚をどんどん奪ってしまっ

自分はこれば氣に入ったから行くよ、何かおもしろそうだから行くよという形に容易に取ってかわられるわけです。相対化ということの背後には当然コンペティション、競争ということが考えられるわけで、いろんな価値が競争によって自分のよさを主張するという、そういう構造に移らざるを得ないという面があります。もちろん短い期間に全部がそうなるということも言っているわけではなくて、情報化の進行とともにおそらくそのような傾向が次第に強まらざるを得ないということだろうと思います。

開かれた“場” 閉ざされた“人”…神社神道の現状

まだほかにもいろんなことを言いたいのですが、もうちょっと問題を絞ってみます。冒頭に申しましたように、私の記憶の中にある一世代、二世代前の神社、そして今の神社、それから近い将来の神社というものを考えて、こういう特徴をもった宗教は情報化時代にどんな風にさらされるのかなということを考えてみました。

ここに「開かれた場と閉ざされた人」と、レジュメにちょっと対照的な表現を用いたのですが、空間的な場としての神社神道、あるいは神社というのは日本の中ではおそらく最も開かれた場所だろうというふうに私は思います。これはある学

生が言っていたのですけれども、非常に神社仏閣をめぐるのが好きな人で、グループでいろいろ行っていると言うのですけれども、お寺というのは時間によって閉まる場合が多いと言うのですね。夕方になると入れない。それから新宗教などですと、そもそも建物に入れない場合がありますし、また入りづらいわけですね。

ところが神社というのは二四時間オープンのところが多い。鳥居は閉めようがないということもありますし、さすがに神殿には入れないところがあるかもしれませんが、空間としては二四時間フリーアクセスという感じのところが多に多いわけです。だから印象としては、場としては開かれている。一番開かれた宗教施設であるということは確かに言えると思います。これはいい・悪いということ抜きにして、実際にそういう開かれたという特徴をもつということなのですが、それと対照的に、そこにいる人になると突然何か秘密のベールに包まれているという感じがするわけです。つまり宮司さんとか神職さんの姿が見えないというか、見ることはできるのですが、何だろうという感じになるらしいのですね。お坊さんというのはその意味ではもう少し開かれている。何か説明してくれというと、偉そうに説明してくれたら、あるいは観光化したところでは、いらっしやい、いらっしやい、みたいなところもある。そういう意味では人として見ると仏

教の方がもうちょっとアクセス可能ですし、新宗教だと、嫌だと言っても、向こうから声をかけてきて、いろいろ勧誘したりもする。つまり非常に人が見えるわけですね。それに対して神職さんの場合はなかなか見えないということです。

ちょっと個人的なことですが、それについてののもしろい話があります。私、昨年パーフェクトTVというCSの番組作りを頼まれました、「若者たちの宗教体験」という番組を編集するというか、実際に企画しました。そのときに國學院大學の学生二人と大正大学の学生二人を連れて四つの宗教施設を体験訪問したのですね。神道では代々木八幡宮、仏教では日蓮宗の池上本門寺、それからカトリックの教会、そのあと創価学会。結構おもしろかったのですけれども、代々木八幡宮へ行って、学生たちに何でもいから質問をしないとダメな感じがしました。あそこは宮司さんは有名な方ですが、一人の学生が「宮司さんは海外旅行をするのですか」とか聞くわけですね。「しますよ」と答えられていたのですが、後で「何でそんな質問をしたんだ」と言ったら、「宮司さんて日ごろどんな生活しているのだろうか、外に出ることがあるのだろうか」と言うわけです。つまり日常生活がイメージできないらしいのです。

それは極端な話かなと思っていたのですが、そのあと何人かの学生に聞いたのですね、神職というか宮司さんのイメー

ジを。そうしたらやはり「わからない」と言うわけです。大
体いるのかいないのかわからない、一体何をしているのか
わからないと。考えてみると、初詣のときドーッと行きます
けれども、ある意味ではほとんど人を介在していないわけ
です。参道を進んで、鈴を鳴らして、お金を入れて、帰りに巫
女さんのいる所で何か求めるとか、そういう行動をしたりす
る人が多い。そうすると、神職さんとパーソン・ツー・パー
ソンで話す機会が普通の人は乏しいわけです。たまに、何か
ちょっと見慣れない服装でスーッとその辺を飛び回っている。
するとこれは何だろうと。確かにそういうふうな印象をもつ
のも不思議ではないと後で思ったのです。その学生も、そう
極端に神道、神社のことを知らないわけでもない、これは今
の平均的な人とそう隔たらない感覚ではないかというふうに
思ったわけです。

こういうふうな顔が見えない人というところと変な表現
かもしれませんが、人を通して神社神道にアクセスする機会
は本当に少ない。場所についてはもう二四時間オーケーであ
る、けれども人に接するケースは非常に少ないという神社の
特徴というのは改めて考えなければいけないのではないかと
いうことです。

いま言ったように、大体神社に行ったり何かする人は多い
わけですが、ただそれは宗教施設だとか、自分の生活に何ら

かのインパクトを与えるものだという意識でかわる人は非
常に少ないわけですね。実際に神社神道にアイデンティティ
をもっている、あるいはさらには進んで信仰をもっている若
い人というのはとても少ないわけです。「宗教と社会」学会
の宗教意識調査プロジェクトでは毎年平均五〇〇〇人ぐら
いの大学生に対してアンケート調査をしまして、今年で四
回目になるのですけれども、毎回宗教についての質問をして
います。その中で「あなたの信仰は何ですか」とか「家の宗
教は何ですか」というふうに聞くわけですけれども、「個人
の信仰」として「神道」というふうに答える人は毎年零点何
パーセントです。〇・三％、〇・四％、〇・五％で、一％に
いかないわけです。今年はまだ集計が終わっていないので、今
二〇〇〇人ぐらい入力した段階なのですが、その段階で昨日
ちょっと見てみたのですけれども、もしましたら、「家の
宗教」として「神道」を挙げた人は二・七％いました。けれ
ども「個人の信仰」として「神道」は〇・四％ですね。これ
の比較で創価学会を見たら、創価学会は「家の宗教」という
のは今回まだ非常に少なくて、一・三％でした。でも「個人
の信仰」という面で見ると一％ですね。つまり家の宗教とい
う意識と個人の信仰という意識のずれが非常に小さいのです
けれども、神道の場合は六分の一になっているわけです。で
すから家ではかわっているけれども、自分のかわりとな

神社神道からの情報発信

るとガクッと落ちるという、そういう特徴があります。「神棚をもっている」というのも大体四割いるのですね。「初詣に行く」という人も四六・七％です。これは毎年大体この数値になるので、今の大学生というのはほぼそれぐらいかなと、五割ちょっと欠ける程度が初詣に行っているということですね。このようにかかわっているのだけでも、信仰としてではない。それと先ほど言ったように場としてはかかわっている。あるいは場だけではなくて、神棚という装置もあるわけですね。お祭りがあれば、イベントには行く。そういう場とか儀礼とか物としては結構かわりがあるわけですね。そういう意味では伝統的な宗教としての神道ということは言えると思うのですが、人のこととなると、もう非常にアクセスの手段がないというか、できていないということがあると思うのです。このことが一つ、今日できれば後で議論の対象になるかなと思いました。もちろん人を介在しなくても、そうしたパフォーマンスによって情報を示すということはもちろんできます。まさに神社という存在があるということで、それは情報を発信しているわけです。そういう情報の発信の仕方がありますけれども、人が介在していないということが次の世代ということを考えたときにどうなるかということですね。これは当事者の方々にぜひとも議論していただきたいことです。

そういうことで、最後に「神社神道からの情報発信」ということで、私なりの意見を申しあげます。私は新宗教を中心に研究していますので、そういうものを研究していますと、彼らがこの情報時代にいかに情報を使うかを考えているさまがわかるわけです。もちろん運動によって差はありますけれども、使う道具だけで言うならば、テレビが出ればテレビ、ビデオが出ればビデオ、通信衛星が出れば通信衛星、あらゆるテクノロジをどう布教に取り込むかという発想をするところが多いわけです。そうしたものを傍らで見て、では神社神道はどうなるかということで、思いつくことをここにちょっと書いておきました。

一番目に、先ほどから申しています人ということですからけれども、これから情報を発信するといっても、機械は自動的に発信してくれるわけではありませんから、発信する人がいるわけです。それをどのようにして養成するのかということですね。いま神職養成コースというのが國學院と皇學館にあって、それぞれいろんなものを学んでいくわけですが、そうしたものは別に、やはり実際の現場に入ってからの人とのつながりというものが、今あるような情報の流れ、例えば神社本庁があって、各都道府県などに神社庁があって、そし

で地域での神社のつながりがあって、中心からずうっと流れていくラインがあると思うのですけれども、それに対しておそらく今の時代というのはそれと多少レベルの違いとか、一種のボランティアなネットワークというものの形成が必要になっていく時代だというふうに私は思っています。

実は新宗教の方でも、やや既成化したような教団では、そういう情報の流れがうまくいかない、あるいは活動が非常に固定化していることが問題になっていまして、それをよく見ていくと、大抵情報の流れがフレキシブルでないわけです。

上意下達みたいになってしまふ。今の情報時代には対応できないことが非常に多くなっているわけです。私は、新宗教の方々に言うときに、教団内の自由なネットワークをつくらないと社会変化には対応できないだろうということをごどもも言っているのですけれども、これはどの宗教ということに限らず、今のこういう情報社会の中ではどこでも抱える共通の問題だと思っています。

つまり今までのいろんな組織というのはやはり近代化の中でできた組織なのです。物が優先し、人と人のタテの関係、個々の命令系統などが優先されてきた組織です。ところが情報時代になりますと、そういうものは逆に弊害になるわけですね。極端な例をいうと、一番トップにわけのわからない人がいると、もうそれでみんなとまってしまうとい

うことです。情報の流れというのは非常に速いし、そして今の特徴というのは、絶えず大事なこと、あるいは流すべきことが変わっていくところにあると思います。それに対応する考え方というものが、それから情報を流すルートというものが必要になるわけで、それは全体組織の構造変革というものとは別の対応策をとらないとなかなか難しいわけです。

何かあるたびに組織を変えようといったって、そう組織というのは変わるものではない。組織は組織でいいのですが、それではなくて、情報レベルで対応するためのネットワークをつくって、それをうまく吸収でき、発信できる人をつくっておかないと、世の中で起こっていることを吸収もできないし、理解もできないし、それにリスponsもできないということです。小さな会社などで、わけのわからない社長が古いコンピューターを言いくるめられて買って、社員が大迷惑をしたという話をよく聞くのです。これは私いま比喩的に申し上げているわけですから、宗教界でもそういうことが起こりかねないということです。

次は情報の内容ということですから、これはあまり私が申し上げるのではなく、後でパネリストの方々にきいて言ってもらえると思うのですが、もし神社ということ、それからお祭り、祭祀、儀礼、イベント、こういうものの以外に例えば言説化して何か伝えようとしたときに、今の神社神道と

いうのは何を一番伝えたいのだろうかということ、つまりメッセージの問題ですね。このことを考えないと、宗教としての神社神道―神社神道は宗教ではないというふうにおっしゃる方もいるのですが、私は神を祭ってにおいて宗教ではないというのは通らないと思うのです。ほかの宗教とはタイプが違う、やり方が違うといった言い方はできませんけれども、宗教ではないというのは、それはもう自己否定だと思えます。そういうことをおっしゃる方にはこう言いたいわけです。神様を祭らないならいいですよ。ちゃんとお祭りして、神前奉仕と言いながら、宗教ではないというのは、それはないでしょうということですね。その活動で、実は何が我々のメッセージですよということがなければ、この非常に価値の相対化が進む情報時代の中では、おそらく存在意義というのはどんどん低くならざるを得ないということです。見ればわかるでしょう、といって、わかる人がだんだん減ってくるでしょうし、見ればわかるというのは、実は見てわかったのではなくて、見ればわかるまでにいろんな人がいろんなことを言ってきたからなのです。つまり家庭で、あれはああだよ、こうだよ、というようなことを言ってくれる人がいるから、ことさら神主さんが説明しなくてもわかるわけです。それで、自然に手を合わせたり、拍手を打ったりするわけです。でも、そういうことを家でもやらなくなりますし、地域社会でも教えなくな

るわけですから、そうしたときに当人たる神職さんが何もやらなくて、「さあ、どうぞ拜んでください」と言っちゃって、そのうちどうしたらいいのかわからなくなっちゃって、神殿にやって来て念仏をとなえる人が出てくるかもしれないわけです。

それから三番目は、ある種やや挑戦的に申すことになるかもしれませんが、でも、だれに向かって発信するのかということですね。神社神道というのはやはり日本という国と非常に結びついてきたわけです。日本という国があつての宗教である。民族宗教というふうに言われますが、それはそれでいいと思います。しかし、いま国は国としてありますけれども、それこそ個人でいいますと、その人にとっての国のイメージというのはとても変わってきていると思うのです。海外生活経験者ということで見ても、いろいろなさまざまな企業で海外に勤務する人がふえている。私、大学時代にあるクラブに所属していましたけれども、その同窓会がある。それで、あるとき同窓会名簿を見て調べたら、一〇人に一人は海外在住なんです。それぐらい海外に出ている。そうすると当然子供はそこで育つという人もふえるわけですね。逆に外国人労働者もふえているわけですし、さらに国際結婚もじわじわふえているわけです。つまりそういう形で国というものをどう意識するか、そしてその一人の個人に国がどう絡まってくるかということも、全体からいえばまだ非常に少数ですけれど

も、確実にそういう国際化、グローバル化の傾向というのはふえているわけです。そういう中でこの「だれ」というのは、どんな国家イメージ、家族イメージ、地域共同体イメージをもった人に神社神道を伝えるのかということですね。たとえばバングラデシュから来た人と結婚した女性の人とかですね、その人たちに神社神道というのはどういう立場をとるのか。

「どんな民族でもオーケーですから、うちの氏子として来てください」というふうに言うのか、あるいは「国籍があって初めて氏子なんですよ」というふうに言うのか、あるいは一方が非常に熱心なイスラム教徒であつたらどうするのかとか、いろいろな問題が起ころうと思います。そういう中で神社神道が発信する相手ですね。

これは新宗教だとあまり問題にならない。つまりだれでもいい。異民族であろうと何であろうと、自分たちの宗教、メッセージが中心ですから、それで布教していくわけです。現に日本産の新宗教だって、ご承知のように創価学会とか真光を筆頭にして、あるいは数十カ国で信者を得ている教団がいくつかあるわけです。私の後輩で宗教真光をずっと研究している人がいますけれども、フランスの真光をとっかかりにアフリカの信者が出る、カリブ海の信者が出るというぐあいでは、世界じゅうあちこちで手かざしをやっているわけですね。それはきわめてコンパクトなメッセージがあつて、どんな民族

であろうと、もともと何の宗教をもつ人であろうと構わないわけですね。

神社神道はきつとそういうものとは違うというふうに皆さん思っていらっしゃると思うのです。何が違うのか、どこが違うのか、そういうことを考えないと、単に情報をやたらと発信すればいいというものではないですね。情報というのは必ず送り手が受け手の側をイメージして送らないと、それはもうその辺の町中で叫んでいるのと同じということになりかねないわけです。今後の神社神道を考えて、そういうことが私個人としては非常に気になっているということです。ですから、できればそれはこうだということを後の座談会の中でおっしゃっていただくとおもしろいかなと思います。

ちょっと挑戦的な内容になったかもしれないけれども、これぐらい言っておいた方が話がおもしろいかなと思います。て、あえてこんな話にしました。どうもご静聴ありがとうございます。

茂木 どうもありがとうございます。実はもう少しきつく神社界の現状を批判されるのではないかと私は思っていたのですけれども、非常に親身になって神社神道の将来のことを考えていただいて、本当に感謝申し上げます。さまざまな問題、課題が指摘されましたので、後ほどのシンポジウムでその問題を討議したいと思います。

シンポジウム

茂木 それではシンポジウムに入りたいと思います。まずはパネリストの先生方をご紹介します。井上先生のお隣からご紹介したいと思います。石井研士先生です。石井先生は國學院大學の助教授でいらっしやいます。昭和五五年に東京大学をご卒業の後、同大学の文学部助手を経られまして、文化庁宗務課の専門職員としてお仕事をなさった後に國學院の方でのお仕事となっています。神道文化会とも非常にかかわりが深くありまして、この六月に神道文化叢書の一冊として「戦後の社会変動と神社神道」という本が間もなく出る予定です。先生のご専門は宗教学ですが、特に都市化と宗教、高度情報社会と宗教、そういうところに重点を置いた研究を続けておられます。

次にご紹介いたしますのは今井達先生です。神社新報社の編集長でいらっしやいます。東京の向島の白鬚神社の権禰宣でもいらっしやいます。昭和五六年に埼玉大学の大学院を修了され、その後國學院で勉強されて、神職の資格を取った後に神道政治連盟、神社新報記者を経られて現職であります。

次にご紹介いたしますのは稲貴夫先生です。現在、神社本

庁の教学研究所の調査室の主任であります。先生は昭和五七年に明治大学の工学部電気工学科を、ちょっと畑が違っていますけれども、ご卒業の後、やはり國學院で神職資格を取られて、神社本庁に奉職されています。組織渉外部、教化部を経られて現職であります。

そこで今日のシンポジウムですけれども、最初に井上先生に一時基調講演をいただき、パネリストの先生方にも同じテーマで、まず一〇分から一五分ご発題をいただきたいと思っています。その後に、先ほど井上先生から課題としていただきましたというふうに思っています。まず稲さんからお願いしたいと思っています。



稲 先ほど井上先生から基調講演をいただきましたが、私もパネリストとして与えられましたテーマについて、若干のコメントの内容をあらかじめ考えてまいりました。その中には、情報化社会というものの対しての受けとめ方について、井上先生と同じように受けとめている見方もあるかと思いますが、考え

るところを初めに報告をさせていただきたいと思っています。

情報化社会に対する神社界の対応ということについては、神社界の教化活動というものを考える上においても非常に大切なテーマであろうかと思うのですが、その前に一つ申し述べておきたいことは、情報化社会とは何かということです。

この情報化社会についての一般的な定義については、「近代の産業社会を営む上で不可欠である様々な原料資源、エネルギー資源を用いて生み出される物や商品のもっている商品価値と同等かそれ以上の価値を有するものとして情報がさまざまな媒体を通して取り引きされる社会」というような一般的な定義があると思うのです。ただ、百科事典などを引くという説明が出ているのですが、ただこれで本当に情報化社会というものが理解できるのかどうか、ちょっと私は疑問に思うところがあります。といいますのは、かつて人類が歴史時代に入ってから情報というものの価値を逆に軽んじていた時代があったのかどうかということです。例えば狩猟時代においては、獲物であるクマとかシカとか、そういう動物の習性とか、狩りに使う道具とか矢じりのつくり方に関する情報とか、あるいは実際の狩猟のノウハウに至るまで、そういうものを含めたいろいろな情報が家庭の中とか、あるいはその部族の集団の中で口伝とか体験学習という形で情報の伝達が行われてきたと思うのです。また農耕時代には、農耕時代なり

の形で、情報というものはきわめて重要な価値としてやり取りされてきたと思うのです。この「情報化時代」という言葉自体はきわめて新しいと思うのですが、一般的な定義の中で言いあらわされているところの意味・内容というのは、何も特段新しいものではないと私は基本的に考えています。

ただ一つ大きな違いがあるとすれば、それは通信技術とコンピュータ技術の発達によって、やり取りされる情報の量とスピードが莫大に大きく、また速くなってきた。そして、テレビとかラジオとかが社会に普及してくることによって、一カ所から発信された情報が瞬時にして日本国内はもとより、受信装置さえあれば世界のあらゆるところまで流れていく。これは少なくとも電信技術が開発される以前には全く考えられなかったことです。

そういう意味での情報化社会の発達によって私たちを取り巻く社会がどういうふうに変わってきたかというところ、いわばお手軽な情報がお手軽な情報媒体を通じて大量に家庭とか社会の中に流れ込むようになってきた、そして、従来からの家庭や地域社会の中で人間関係によって保たれ、やり取りされていた情報伝達機能というものがあまり機能しなくなってきたということが言えると思うのです。

例えば家庭の中で親や家族と一緒に過ごして、そこで先祖様の話をするとか、地域のいろいろな出来事を話すとかする

中で家族のコミュニケーションが成立し、家族の中に様々な情報が蓄積されていく。かつてはそういう家庭が普通であったと思うのですが、今日はなかなかそういうことが行われ難くなってきた。こういったことが言えるのではないかと思うのです。

それで、特に現代の子供たちについて様々な問題があげられています。家庭教育というものの一つの情報伝達と考えることができます。しかし、しつけとか、行儀などの家庭教育がなかなかできなくなってきた、家庭教育の情報としての価値がだんだん低く見られてきた。これも現代の情報化社会の一つの特色かと思います。それでは現在の子供たちもっている情報が少ないかといえば、もちろんそうではないですね。家庭の外側、地域社会の外側からいろんな媒体を通じて大量の情報が入ってくるわけですが、テレビなどは言うに及ばず、最近は子供向けの情報誌もたくさん出ており、ちょっと見てみると、大人顔負けの内容が書かれていたりします。また、これは情報化と直接は関係ありませんが、最近ポケッタモンスタースタイルゲームがすごいブームで、恐らくやらない子供は非常に少ないと思います。とにかく子供たちがゲームばかりしている。あまりやるものだから、親が子供に注意する。すると子供は一時的にはやめます。そして、そのゲームを今度は親がやってみると、これが意外とおもしろいということ

で、今度は親がゲームにはまってしまおうというような話もよく聞くわけです。

そういう具合に、どんどん情報化社会が進行してゆくわけですが、そういう主流は暇つぶしの情報、軽い気分で参加できる情報活動ではないかと私などはとらえています。そうした反面、身近なところにある地に足のついた情報、人々の経験によって築き上げられてきた生きる知恵などの情報があまり重く見られなくなってきたということが言えるのではないかと思います。

また、今日の情報化社会は、技術主導型の現象としてとらえられていってしまっているような感じがします。しかし、これからの情報化が進んでいく社会の中で、神社界が抱えている問題というのは、単にパソコンを導入するとか、インターネットに加入するとか、そういう技術媒体の問題とは全く別のところにある私は考えています。さまざまなメディア、媒体を通じていろんな情報が社会に氾濫していく中で、かつての日本人の多くが当たり前に持ち合わせていた神社に関する基本的な情報が現代人には伝わらなくなってきた、理解されなくなってきた。伝わったとしても、ほかの多種多様な情報の中に埋没していってしまう。そういった状況の中で神社界がいかに神社の情報を正確に発信し、一般の人々に受けとめていただくようにするかということを考えなければならぬ

ということが、情報化社会の中での神社界の大きな課題であるかと思っています。

そのために何かうまい方法はないものかと考えるわけですが、そのための手軽にできるうまい方法というのは絶対ないと思います。ただ、何かそのための努力はしていかなければならなりません。その点について考えたことを今からご報告させていただきます。

まず最初に方法的なことですが、神社の情報機能をよりよく充実させていくということが言えるのではないかと思います。もちろんこれまででも神社で社報を発行するとか、あるいはポスターを掲示するとか、いろんな形で広報活動を展開してきたわけです。しかし、今の社会においてはそういったものから人々の受ける神社の情報は、ほかの多くの情報の中のワン・オブ・ゼムにすぎなくなってきたという状況があります。しかしながら神社というのは、その存在そのものが歴史的に見ても地域における大きな情報媒体として機能してきたという面がありました。季節、季節の祭りの中で神社に地域の人々が集い、様々な情報を交換するというコミュニケーション機能があったわけですが、ところが、氏神神社に集まる人々は狭い地域社会に限られている反面、最近の人口の移動と交通の発達などによって都市が拡大し、人々の生活範囲も拡大していくと、氏子区域という狭い範囲の情報では

人々は飽き足らなくなってくる、そして氏神神社との関係も次第に薄れていってしまうという状況があると思うのです。こういった中で、神社が本来もっている情報機能にもう一度着目して、神社の情報機能の中でまだまだ未開拓な部分を開拓していく必要があるのではないかと考えています。

例えば、神社というのはその御鎮座以来のさまざまな歴史情報をもっているわけですが、それはこれまでの先人たちの歩みとして言葉でも表現できますし、その歴史の結実として現在の御社殿や境内地があるわけです。また、様々な文化財をもっている神社もたくさんあります。それに鎮守の森があります。日本は特に南北に長く、それぞれの地域で鎮守の森の植生もかなり違ってきます。その土地の原生自然に近い森もあれば、ある時期に地元の人たちが勤労奉仕をしてつくった森もあります。また、御神木として信仰されている巨樹がある鎮守の森もあります。こういったものは歴史情報と言えますし、その土地の生態情報という形でとらえることもできるかと思っています。それらを総合して文化情報という形で表現することもできるかと思っています。

そして神職が多数常駐している規模の大きな神社は、そういう文化情報をさまざまな媒体で表現し、神社としての広報活動を行ってきたわけです。しかし、神職の常駐していない兼務社や宮司さん一人のお宮では、こういう広報活動はでき

ないと思います。そこで、ある一つの区域、市町村など的一定区域の複数の神社が協力し合って、その地域の神社が有しているさまざまな文化情報を取りまとめて、その発信に努めるということも可能ではないかと思っています。

その一例として、神社のガイドマップのようなものをつくるということも考えられます。地域の神社のガイドマップをつくって、そこにただ単に神社の場所とか交通機関だけではなくて、それぞれの神社の御鎮座の由来とか、お祭りなど様々な文化情報の他にそれぞれの神社の相互の歴史的な関係などもわかりやすく解説したものがあればよいかと思っています、それを作成するための基礎資料として、神社本庁が行った「祭祀祭礼総合調査」の結果なども活用できるかと思っています。また、行政単位内の神社が協力し合って、神社に関する文化財や祭礼行事などの情報の素材をまとめて各方面に提供すれば、地元の教育委員会とか小中学校などとの連携も可能になると思いますし、地域情報として報道関係などの媒体にも載りやすいのではないかと考えています。

こういったことはすでに多くの地域でやっていることですし、教化活動として当たり前じゃないかと言われるかも知れませんが、こうした例をお示したのは、情報化社会と神社神道という観点で言えば、神社界の組織内部の情報化の問題とも関連してとらえられることができるのではないかと考え

たからです。

現在の神社界の組織を神社本庁を中心に考えてみると、神社本庁、神社庁、各支部があって、それぞれの神社、神職があるという組織形態ができています。そしてこれまで情報化というと、いかに中央の情報を各地域の神社、神職まで素早く伝えるかといったことだけに主眼が置かれてきたような気がします。そして、近隣の神社とか近隣の神職相互の横のつながり、ネットワーク化ということに関しては意外と関心が注がれてこなかったのではないかと考えて、こういった事例を挙げたわけです。

このネットワークにつきましては井上先生も若干取り上げられました。なぜこういったものが大切かといいますと、例えば地域が狭くなると兼務社の問題とか、実際にそのために動ける神職の数が少なくなるといような問題があります。しかし必ず地域には神職以外の神社への理解者、熱心な協力者がいますし、また、そういう人を発掘していくという意味でもこうした地域毎の神社のネットワーク化というものが必要になってくるのではないかと考えたからです。

地域の神社が、一体となって情報活動を主体性をもって展開していくということがこれから必要になってくるのではないかと考えています。

それからもう一つが、神社界の共通認識の問題です。これ

は、ある意味では神社界の組織上の問題ですが、神社界がこれからの社会に対してどのようなビジョンをもっていくのか、神社界の社会に対するグランドデザイン、基本構想と言ってもいいかと思いますが、そういったものを固めていかなければならないと考えています。そういったものがあってこそ情報発信にも力が湧いてくるのではないかとというふうに考えます。特に今日は青少年教育の問題とか、いろんな社会問題があります。また環境問題にしても、ダイオキシンの問題とか、最近では環境ホルモンとか、いろんな問題が出てまいりました。それから政治家や官僚、財界の汚職とか、金融破綻の問題とか、それから脳死の問題とか、生命倫理の問題とか、あるいは日本の農業、特に稲作の抱える問題とか、さまざまな社会問題があるわけです。それでは、そういった社会問題と神社神道の教学、あるいは各地域の神社との関係をどうとらえるのか。そういった社会問題と神社界はどういう関係にあるのか、あるいは関係はないのか、こういった問題については、それぞれの神社関係者がそれぞれの問題意識の中で様々な活動をされていると思いますが、それらが実際の言葉としてあらわれてこない、それらの問題に関して神社界として情報活動を行うことはできません。

そのための基本理念、それから基本構想、グランドデザインを確立していくためにも、例えば「神社新報」などの情報

紙をもっと活用して、神社界内部での情報交換や議論を盛んにしていかなければならないと思います。また、そうした内部の情報交換を意味あるものにするためにも、神社界は外部からの情報により敏感でなければならぬと思います。情報というものはただ発信するだけではなくて、取り入れることも大切です。そういう外部情報と内部情報との双方を神社神道の基本理念に即して的確に把握・分析して、これからの神社界の取り組みにフィードバックしていく。こういったことは言葉で言うのは簡単ですが、これからの神社界全体の組織の問題とか、神職養成の問題とか、さらには神職とは何かとか、そういった問題まで考えてゆかなければ、なかなかうまくいかないと思います。ともかく、いつの時代であっても、情報伝達がうまくいかず、組織の存在理念を構成員に普遍化できない組織は、いずれ制度疲労を起こしてしまうのではないかと。ある意味では、それが情報化社会の中にある組織の宿命でもあります。私もそういったことを肝に銘じていかなければならないというふうに考えています。

茂木 ありがとうございます。神社界の内部にいらっしゃる立場で現状の社会をどうとらえるか、その中でも神社界の課題を二つ挙げていただきました。議論は後に回しまして、早速、次の石井先生からのご発言をいただきたいと思っています。それでは石井先生、よろしくお願いいたします。

石井 情報化に関しましてはもう稲さんにまとめていただきましたので、私の考えていることを話したいと思います。



もっているということを前提としています。メディアを流れる情報が全体としてみると質的、量的に圧倒的に違うのだということをぜひ最初に認識しておきたいと思います。

そうした情報化社会の中に我々も、あるいは宗教団体も存在するわけですから、そうした社会の変化に影響を受けないではいけないということですね。そこからいろいろな問題が発生してきているというふうに理解しています。そのときに二点ばかり分けて話を考えた方がいいだろうと思うのです。

一つは、教団の情報化ということですね。高度情報化していく中で教団自体もいや応なく巻き込まれていく。その中で各教団がどういうスタンスで対応をとるのか、とらないのかという問題ですね。ですから、ある意味では布教の段階で新しいメディアをどんどん取り入れる、あるいは組織内のコ

ミュニケーションを従来の形とは違ってコンピュータのネットワークを構築してやるのか、あるいはファックスを設置して、従来電話でやっていたものをより正確にするのかとか、そういう組織や教団のレベルでの情報化というのが一つあるのだらうと思います。

それからもう一つは宗教の情報化というレベルがあるのだらうと思います。簡単に説明しますと、これは先ほど井上先生がおっしゃったことも関係があるのですが、ある意味では我々一般の日本人がメディアを通して宗教情報を得る場合に、必ずしもそれがきちんとした宗教団体や宗教者の情報であるわけではないのです。神道に限定して言う、若い人たちにとってある意味で神道とか神社というのは非常になじみ深いものでもあるのです。

よく事例に挙げるのは「セーラームーン」の話なのですが、最近はやらなくなってしまうたのでご存じない方がいらっしゃるかもしれませんが、「月の種族」の末裔で、金髪の女の子なのですが、「月野うさぎ」という女の子がいます。変身をして、「月にかわっておしおきよー」という言葉で悪者をやっていくという、小さいお子さん、それから二〇代、三〇代の男性を中心に受けたアニメがあります。その「セーラームーン」の「セーラー戦士」の中の一人に「火野レイ」という女の子がいます。彼女は元麻布の「火川神社」の巫女さ

んという役柄で出てくるのですね。ヤタガラスを使いながら悪者をやっつけていく。漫画やアニメの中では「火川神社」で出てくるのですが、マニアの間では元麻布の氷川神社が舞台だということが知られております。お正月になると、それまで三が日で数百人しか来なかった神社に、「セーラームーン」がはやってから、元旦だけで一〇〇〇人近く、地方からも上京して来る。その中で数人ですが、男の子ですよ、「セーラー戦士」の着る女の子のセーラー服を着て、短いスカートをはいてやって来ます。お宮では「セーラームーン」の絵馬は頒布していませんが、どこから手に入れたのか、ちゃんと「セーラームーン」の絵馬を求めて、「早くセーラー戦士に会えますように」などと書いてかけていく、そういうお宮として存在してしまうわけですね。

これは情報の中で二つの神社のイメージがずれているわけです。地元の氏子さん方にとっては平安時代の末期に建てられた由緒あるお宮、氏神様ですけれども、若い方々にとってはアニメや漫画の中の「セーラー戦士」の一人がいるお宮というイメージですね。

いま申し上げたのはたった一例ですが、こういうことはかなりいろいろな点であるようです。情報が増し、いろいろなところで新しいメディアを通じて流れていく中で、従来の神社とは全く違った意味合いで受け入れられているという状況

があるようです。

もう少し言いかえますと、神社というものに対するオーソリティーの所在といえますか、神社に関する知識や具体的内容というのは、これまで神社本庁をはじめ、あるいは個々の神職さんや神社をはじめ、その方々がもっていらして、情報を発信していたのだろうと思いますが、現状では違った方々が自分たちの立場によっていくらかでもそういう情報を流せるという状況にあるわけです。受け手の側としてみれば、情報自体としては漫画家やアニメーターの出す情報の方がおもしろいわけです。神社の出しているパンフレットの「お宮の由緒は…」というよりは、ここにはセーラー戦士がいて、ヤタガラスがいて、変わったおじいちゃんのキャラクターの宮司さんがいてという、その方が情報自体としては彼らにとってはおもしろいという現実があるようです。この点に関して、一体神社自体はどういう情報を発信してそのオーソリティーを回復していくのか、あるいは少なくともきちんとした情報を得ようとした場合にどこで何を聞けばいいのかということが大きき問題になるのだろうというふうに思います。

最近の教団の情報化についても少し申し上げたいと思うのですが、いま日本の宗教団体全般を見ますと、日本の社会自体が高度情報化の中で、積極的に、あるいは業者に勧められながら、教団自体の情報化は進んでいるように思います。

私の知っている限りではアメリカのアーミッシュのように情報化を積極的に拒否している団体というのはありません。

平成三年に全国浄土宗青年会が調査したアンケート調査の結果があるのですが、「寺院にある情報機器の普及度」ですが、平成三年の時点でコピー機とワープロが七八％、教化用のビデオ、放送設備、ファックスが三七％、パソコンが三二％という数値が出ています。おそらく平成一〇年の現在であれば、この割合はかなり変わってきて、全体的に高くなっているだろうというふうに思うのです。

ところが、こういう情報が本当に必要なのか、あるいはそのことによって自分たちの教団にプラスになるのかどうかということは、どうもきちんと考えられていないように思います。どちらかといえば、社会が高度情報化しているから、あるいはほかの教団がそういうことをしているから、あるいは便利だからという理由であって、宗教上の理由ではないように思います。

例えばお寺には現在、かなりの割合でファックスが入っているようです。理由はわかりますね。お寺の場合にはいつ、どこで人が亡くなって葬儀の依頼があるかわからないわけですね。だから、これまでのファックスのない時代であれば、夜中でも電話がかかってくるわけです。この日に葬儀したいけれども、お寺はあいているかどうかという確認をしなくて

はいけない。ところがファックスが入れば、お坊さんは寝ていられるじゃないですか。葬儀社だって、ファックスを送っておけば安心です。朝起きると、ファックスが入っていて、こういった依頼があるのかと。それで、時間を調整して、できるのか、できないのかというやり取りをするということ、もう夜中に起きる必要もなければ、眠いときにボーッと聞いて間違えることもない、きちんと事務がはかどるということになるのだらうと思います。

最近では神社にもパソコンが入っていて、私はあまり進んでいないんじゃないかと思っています。氏子の方々の管理をされているように伺います。ご祈禱があった方々の住所を入れて、そういうところへダイレクトメールで渡しているというお宮があるのも知っています。実際「神社新報」などにもよく広告が載りますね。詳しい話は知りませんが、NECが積極的なようで、「崇敬者管理システム」といううたい文句をよく見ます。宣伝文句を見ると私はいつもおかしいなと思うのですが、「神主さんもニッコリ。NECが新しく開発した崇敬者管理システムは、多くの崇敬者の情報を一つのコンピュータで管理することを目的とした神社向けのシステムです。崇敬会の入会受け付けや寄進の受け付けや、各問い合わせ、祭典行事の案内処理などが簡単な操作で素早く実行できます。忙しい神主さんの事務作業を軽減し、崇敬

者へのよりよいサービスを実現します」と。本当にこんなことがコンピューターを使えば実現するのかわけですね。

むしろいろいろな点で煩瑣ではありませんけれども、電話をしたり、あるいは個別に手紙を書くことで氏子さんの方々との人間関係は正常に保たれるのであって、ある意味ではかえってこんな崇敬者の管理ソフトを使ってダイレクトメールを出すことによって、確かにダイレクトメールあるいは情報を発信すること自体の回数はふえても、質の問題でいうと、お宮と崇敬者の方々の距離は遠くなるんじゃないかと思うわけです。

今はこうしたこと一つひとつのことを断罪するつもりはありませんが、そういった教団の情報化が実は組織としての、あるいは布教の質を変えているのではないか、必ずしもプラスに働くわけではなくて、マイナスに働くこともあるだろうということが想定されるのに、一切そういうことが前提にされずにやられているというのが現状ではないか。そのことももう少し考えて、使えるもの、使えないもの、使う時期、使わない時期というのを考慮しながら情報化に対応していくことが必要だということです。

先ほど井上先生が情報の発信ということを言いましたけれども、どういう情報をいつ発信するのか、場合によったら発信しない情報というのがあるということも重要だろうと思う

のです。

例えば、浄土真宗本願寺派、いわゆる西本願寺がつくっている布教用のビデオに「仏典物語」・「極楽浄土」というビデオがあります。三〇分、一本つくるのに二〇〇万円かけて、大変よくできたアニメです。「仏説阿弥陀教」を説明するためにつくったビデオなのですが、「仏説阿弥陀教」というのは、極楽浄土がどういうところなのかというのをお釈迦様が説いたという内容なのですね。見れば、あんなるほど、「仏説阿弥陀教」はそういう内容なのかということはわかるのですが、逆に極楽浄土が映像化されるわけです。イメージションをかき立てられる部分がなくなって、正直言って、これを見て、これが極楽浄土ならもういいやというところがやはり出てこざるを得ないのでですね。あつ、何だ、極楽浄土っていうのはこんなところなのか、ということですね。ですからそういうことも考えて、布教とか情報をどこまで提供するのか。実はこれ以上は極楽浄土は絵にできないんだといって、作らないという手もあると思うのですが、このビデオは全部してしまったということです。

教団の情報化の問題、それから社会自体が高度情報化していく中で、オーソリティーのない、宗教家・宗教団体の係わらない情報量が増大していく中で、どういう情報を提供していくのか、修正していくのか、あるいは修正しないのかとい

う問題を、かなり真剣に考えていかなければいけないのではないかという問題提起だけをして終わらせていただきます。

茂木 ありがとうございます。それでは最後になりました。たけれども、神社新報の今井先生、よろしくお願いいたします。



今井 三人目になりました、そろそろ皆さんも飽きている

と思います。皆さんに情報化というものを大体しゃべられてしまいましたので、少し観点を変えてお話ししたいと思います。

神社新報の編集長をやっていますと、何を勘違いしたのか、神主さんが、神社をよく知っています。具体的に役に立つ情報をくれるのか、そういうことを言うてくる方がいます。さて、神社界はどうしたらいいのか、神社はどうしたらいいのかというのを、私たち編集者が果して情報としてもっているのか。

もっているわけがありませんで、もっていたら私は神社へ帰って、それをやっていると思うのです。私が今何をやっているのかといいますと、例えばいろんな情報を集めるというのはおかしいですけれども、事実の事柄を集めてきて、それをあ

る程度自分で整理して、それを伝えている。ですから集めてきたものをもう一遍整理して伝えていくこと。これを難しい言葉では「情報伝達」というのかもしれないけれども、そういうことをしているわけです。そうしますと、伝えていくことはありますが、あなた方に直接教えることはありませんよとなってしまうのです。ではどういう立場でやっているかといいますと、神社界を守ろうとか、反対派から見れば、反動的とか、復古主義とか、権威主義的とか言われるような、そういう考え方でしょけれども、そういうものにある程度私自身が神道を守るといふポリシーをもって情報を集めて、それをもとに報道して新聞をつくっている。いま情報化社会ということが言われた場合に、これがとりあえず私の立っている立場で、それをお伝えした上で編集長として今日は発言するのですけれども、途中からは白鬚神社の権柄宜としても発言しますので、その点ご勘弁ください。

では、情報を発信していくということですが、それはだれがやるかといったら、それは各機関の広報の方が発信されると思うのです。機関には広報課というものがありますけれども、その部署がその機関の主張することを明確に外部に向けて発信する、そういうお仕事に当たっておられると思います。

では「広報」というのどういうことか。こういう場合、先

ほど稲さんも「百科事典に書いてある」という表現をされたが、広辞苑で調べますと、「広く知らせること、またはその知らせ」と書いてあります。ところが「広報」という言葉にある悪魔の事典で調べますと、「広報とは、自己の都合にいい部分のみ相手の都合も考えずに公表し、イメージの押し売りをする」と、これが「広報」だというのですね。これはまさに正鵠を得ているというか、また今の情報発信という姿をあらわしている言葉だと思うのです。

それではこれに対して私たちはどう考えていったらいいか。そこで「情報」という言葉は、広辞苑には「ある事柄についての知らせ。判断を下したり、行動を起こしたりするために必要な知識」と出ています。私たち編集者は広報が出した自己のイメージの押し売りをするお知らせというのを集めてきて、それを整理しなければ変なふうになってしまうため、情報整理という事で、編集というフィルターを通して判断を下したり行動を起こしたりする必要な知識という情報にまとめ上げて、皆さんに発信していく。これが私が情報化にとっ必要と考えている立場なのです。

では、情報化社会においてどうしたらいいかということをきくと、情報化社会においては積極的な情報提供をしなければならない、情報発信を心がけねばならない、こういうものすごくもったもな発言があります。「これに対して反論があ

りますか」と言うと、皆さん「ございません」と言うと思うのですね。でも、もうちょっと考えたいのは、いま神社界での情報発信のことですが、宗教界全部というと、ほかの教団の悪口になるかもしれませんので、世間一般的に言うと、先ほどの「広報」の悪魔的解釈と一緒に、自己の都合のいい部分のみ相手の都合も考えずに公表し、イメージの押し売りをしているように見えます。もうこれだけ悪口を言ったのですから、神社新報に対する自戒の念というのは十分に込めているということをごさんわかってほしいのですけれども。

「相手の都合も考えずに公表し」というのは、相手が必要としない情報の提供をしているのではないか。相手に必要と思わせて情報を提供するというずるいやり方もあるのですけれども、相手が必要としない情報を提供している。それから相手が情報を欲しいなと思っているにもかかわらず、その要求を理解せずに、イメージの押し売りをしている。それで情報発信ということを阻害していることがある。これは神社界にありがちなことなのですが。簡単な言葉をつかってやればいいのに、難しい言葉をわざと使って、わざとわからなくして、情報を難しくしている。

これは私の奉仕している白鬚神社の事例なのですが、三週間前にお神輿を出しました。町内をお神輿が回っていたら、町内の人が「何でお神輿を出すということをごスターに

書かないんだ」と文句を言われたのです。ポスターには「神社神輿、氏子内巡幸」と書いてしまったのです。これではまるきりわからないと言われたのです。「お神輿が町内を回ります」と書けばいいんだと怒られたのですね。これは相手の都合を考えずにイメージを押し売りをしたというか、難しい感じを使えば神社らしいだろうという形でイメージの押し売りをしてしまった、反省すべき点だと思うのです。

情報化社会と難しく考えるのですけれども、どうもこの言葉を聞いてみたら、相手が欲することを理解する、そして相手の都合を考えていい情報をイメージの押しつけにならないようにスッと出せばいいんじゃないかと。こんなことが今後の課題として一つ考えられました。

逆に情報を集める側というふうに考えてみますと、これも例えば取材や何かも含めて反省、自戒の念を込めて言います。先ほどの「自己の都合のいい部分のみ相手の都合も考えずに公表し、イメージの押し売りをする」ということを裏返して考えますと、「自己にとって都合のいい部分のみ相手の都合も考えずに公表を迫り、それでイメージをつくり上げていく」。情報収集だといって、情報化社会なんだから情報を出せ、あなたのところは情報をだしていいじゃないか、そういう言い方をして公表を迫っていく。で、取ってきた情報をバサバサと切って、イメージをつくり上げていくといった、

非常に危険な方法があります。もちろん情報を出せと迫ったときに向こうが嫌だと言ったようなことも、「相手が嫌だと言った」という情報としてインプットされて、嫌々出した情報ですがといってまた公表すると、新たなイメージがつけられますね。そういうふうな情報操作というものも今後起こり得るのではないでしょうか。

とりあえず一番初めに当座のコメントとして「自己の都合のいい部分のみ相手の都合も考えずに公表し、イメージの押し売りをする」という、この言葉が何か情報化社会における一つのキーワードになるのではないかと思います。とりあえずのコメントとさせていただきます。あとは議論の中で一つ一つお話していきたいと思います。

茂木 ありがとうございます。井上先生のお話を受けて、稲先生、石井先生と、だんだんと同じ方向で議論が進んでいると思います。突然いまの今井先生のお話でした。新聞の編集長という立場で、編集というフィルターがかかると情報というのはかなりいろんな方向にいつてしまう可能性があるという話でして、ちょっと議論が多岐にわたってしまいましたが、これからどういう方向で話を進めていったらいいのか迷うところなのですけれども、とりあえずここで一番最初に基調講演をいただきました井上先生のお立場で、三人の先生のお話を伺って、まず一言ずつコメントをいただいで、

その後、最初に井上先生に課題として提出していただいた問題、そういうことの議論を進めていきたいというふうに思います。井上先生、よろしくお願いします。

井上 逐一というよりは、ちょっとまとめる形でご意見を申し上げたいと思います。情報化というときに、しばしばこれは手段の問題に話が集中することがあるのですね。たぶん石井さんがおっしゃった教団の情報化というのはそういう問題だと思います。実はこれは別に宗教だけの問題ではありませんで、例えばコンピュータだというと、我々がいる國學院大學も大騒動しているわけですね、LANを引くの引かないのと。私は委員をやっていましたから、ずいぶんいらいましたのですが、ようやく今年設置されることになりました。それは、LANというものがわかってる先生とわかっていない先生がいるので、そういうことになるのですけれども、しかし長い目で見れば、いずれそうなるわけですね。つまり放っておいたって、社会がその方向に推移していくときには、学校であろうと、宗教団体であろうと、会社であろうと、それは必要に迫られるところから変えていくわけです。会社はすぐビジネスにかかわりますから、例えばコンピュータ化するというなら、パッとやります。お坊さんも、檀家をいっぱい抱えているところは、それは便利だとなったら、やるわけです。あまり氏子もないような神社だったら、別にコン

ピュータを使わなくなったって差し支わりないから、本当に困ったときまで入れないというようなことでして、そういうものは、社会の構造が変わる、テクノロジーが変わると、それにパッと対応するところと、後からのこのこついていってもそんなに大差はないということがあるだけのことでして、長い目で見ればそんなことは繰り返し起こってきたことなのです。新しいメディアが生まれるたびに。

ですので、もし、もっと効率よく神社界の情報を流すにはどうしたらいいかとか、例えば「神社新報」をもっとおもしろくするにはどうしたらいいかとか、そういうことだったらいくらでもというか、話は簡単なのですね、私に言わせると。「神社新報」一つとっても、先ほど「都合のいい情報を」というふうに言いましたけれども、逆に都合の悪い情報を載せればおもしろいのですね。私もかつて自分の意見が抹殺されたことがあるのですが、いろんな意見を載せて、ディベートをやって、こんな意見がいっぱいあるんだと、どうしたらいいかというふうにやれば、おもしろくなるに決まっているのですね。ですから、そういうテクニクの次元というのは実はそんなに根本的なことではない。ただ、経営面ではそれが大事なことです。ですから、もしこれが「神社新報」の部数をふやすにはどうしたらいいかとか、各社頭のお賽金をふやすにはどうしたらいいかという話でしたら、それに合

わせた情報化ということでやればいいのですね。

ところが私が感じ取った課題というのは、そしてまたお三方もおそらくそういうことを意識されていたと思うのですけれども、それは社会が変わることによって、神社神道がもっている根幹のところみたいなものが問い直されているのではないかということなのです。先ほど石井さんがビデオのお話をされましたが、これなんかおもしろい例でして、要するにアニメという手段が出た。さあ、どう使いますかということなのです。そうすると、くだらんアニメを使うと逆効果になってしまうのです。いま言ったように、こんな浄土になるかということになるわけですが、うまくつくったなら、そこで今までになかったようなイメージを広めることもできる。まさにづくり手の潜在的な能力が新しいメディアとかテクノロジーを前にして発揮できるか発揮できないかという、そういう突きつけになる。そういうことを考える方がより本質的だと思っています。

だから、ある意味では神社神道は非常に大きな試練のときを迎えているという考えをもっています。それは、伝統的なものに寄りかかっていた要素がどんどん崩れている。これはもう間違いないことで、おそらくこのことに関しては三人の方も異存はないと思うのですけれども。崩れるということは、別にそのこと自体は私は悪いとは思っていないのです。構

造が変わったということですから。もしある宗教が生命をもつものであるならば、その変わったことに対応できるはずだと。変わったことによってなくなるものは、それはなくなるのです。文明だってそうだったわけです。トインビーを持ち出すまでもないのですが、文明も生まれたり滅びたりする。宗教もたぶんそういうことだと思うのです。ですから、ある意味では今の情報化社会というのは、情報を発信するとか受信するとか、その能力とかその機会がいま変わっているときに、じゃあ神道って何だろうということをもう一回考えざるを得ない、そういうシチュエーションになったということが情報化社会の最も怖いところだというふうに考えなければいけないと思うのです。

おそらく稲さんがグランドデザインというふうにおっしゃったことはそれにかかわると思うのです。ですからこれはたぶん抽象論で話して、いいグランドデザインを立てましょうというような話ではないと思うのです。もう少し踏み込んだ、それこそグランドデザインの具体例というのを出さなくてはいけないときで、むしろ私は「ではグランドデザインとしてどんな選択肢があるのでしょうか」ということを聞きたいです。そのことはおそらく石井さんが二番目の宗教の情報化でおっしゃったことにかかわることで、その宗教が本来表現すべきものは何であるかということを考えなければなりません。

神社に関しても、小さいときから慣れ親しんだでしょうということでは済まないということですね。先ほど私がわざわざ外国人の例を出したのはなぜかという、だからそういうふうに言わなくてもわかるという人がどんどん減ってきますよ、そのときにどういふに言語化するのですか、ということなのです。あるいは言語化しなくても、では施設でということだったら、どんな施設かということですね。そういうところを今度もうちょっと具体的に一歩足を踏み込んで言っていただと、話はおもしろくなるかなということです。

茂木 ありがとうございます。そこでお三方に井上先生のお話を受けて先ずお話を戴いたわけですが、これはそれぞれ先生の話を聞く前に準備したことですので、井上先生のお話を受けて、また今のコメントを受けて、それぞれ一言ずつ順番にお三方からお話をさせていただきたいと思うのですけれども、まず稲さん、お願いします。

稲 井上先生の基調講演の中に、私どもに対して神社神道のメッセージとは何かとか、これからの国、国家というものをどう意識するのかとか、あるいは教団内の自由なネットワークの必要性とか、いろんな問いかけがありました。そこで私も先ほどのコメントの中で、神社界の中の小さな地域のネットワークの必要性ということで報告をしたわけですが、例えばこれもそういう地域というものを越えた一つのネットワー

クと言えると思うのですが、神道時事問題研究会とか、あるいは平成神道研究会とか、神社界の中にもそれぞれの問題意識に基づいたさまざまなグループがたくさんありますし、あるいはインターネットの関係でいえば、「神社オンラインネットワーク」といったものも活動していきまして、そういった意味では様々なネットワークがこれから神社界にもできつつあるのではないかと思います。ただ、私が先ほど申し上げた小さな地域のネットワークに関していえば、神社界の基本理念である、氏神信仰、氏子区域の希望というものはこれからも大切にしていかなければならないという視点に立って情報化の問題を考えたときに、そういった地域のネットワークが必要ではないかということを申し上げたわけです。

例えば、「神奈川の神社・ガイドブック」という本が、昨年出版されまして、これは神奈川県内でしたら大きな本屋さんでなくても出回っていると思います。ただ、この本を見れば県内の主要な神社のことはわかります。ただ、私は神奈川県川崎市の麻生区に住んでいるのですが、近くの氏神様はこの本には出ていないわけです。一般の方々の中には、自分の氏神様がどこにあるのかわからないということで神社本庁に問い合わせてくる方もいらっしゃるものですから、神奈川県という広い区域の中だけではなくて、市町村単位とか、あるいは付近の近くの一〇社とか二〇社くらいの神社が、一つ寄り集

まって、地域の文化情報として神社に関する情報を発信していくようなことをこれから考えて、実践に移していけたらいいんじゃないかと考えています。

それから井上先生からグランドデザインの具体例というところで逆に聞いかけがありました。グランドデザインというと、何か大段に掲げて論議しなければならぬような気がするのですが、ただ私が具体例と聞いかけられて実際に思うことは、別に国家レベルの、世界レベルのというような次元の問題だけではないということです。神社の歴史を考えてみても神社が日本史の中で歴史の表面に表立って出てきたということは、これまでもあまりなかったのではないかと思います。ですから神社が、現代人の一つの心の支えとして、社会の平安、安寧をこれからも守り伝えていくための心のよりどころとしての機能をこれからも保ち続けていくためにはどうしたらいいのか、これからの神社界のグランドデザインの具体例の一つとして、そのための方法論を形づくっていくということが、大きな課題としてあるのではないかというふうに考えています。中途半端かもしれませんが、ここまでにさせていただきます。

茂木 どうもありがとうございます。石井先生、お願いします。

石井 やはり井上さんとはちょっと違うことを考えていま

して、例えば先ほど井上さんはテクノロジーの進歩というのが多少の時間差を置いてどの組織・団体にも影響を及ぼし、それはそういうふうに巻き込まれていくんだという言い方をしていましたけれども、私は宗教に関してはそうは思わないのですね。

アメリカにはアーミッシュという宗教団体があって、これは今でも基本的に文明を拒否している。自分たちの信仰の維持というのを第一に考えると、ことさら電話もいらないし、コンピューターもいらないし、冷蔵庫もいらないし、テレビもいらないという生活を唱えているグループがあるわけですね。

あるいはもう七、八年前になりますが、神宮道場で話をする機会をいただいたときに、その日は朝九時から四時ぐらいまで一日じゅう他の教団でいかにアニメ・漫画が使われているかというのをダーッとやったのです。まるでほとんど洗脳みたいに次々とビデオを見せながら、漫画をコピーして見せながら、こんなに布教に使っているんだという話をワーッとやって、一番最後にレポートを書いていただいたのです。レポートのタイトルが「神社界にとってもこういうメディアを利用することが必要か、必要でないか」、どちらかを選択して、理由を書きなさいと。ちょうど一〇〇名近い方がいらして、二人を除いて全員が「利用すべきだ」と。理由は二つし

かなくて、一つは「日本社会が高度情報社会化となっているから」。これはきつと私の説明がうまくいったのではないかと思います。もう一つは「他の教団もやっているから、自分の教団も遅れたらいけない」というものですね。ただ、反対だったお二方の意見ともなるほど思いました。そういう選択肢もあるという自覚をもったのですけれども、神社の境内に流れている時間というのは古来から現在まで変わることなく悠久に流れているのだと、だから別に新しいメディアがあらわれたからといって何もする必要はない、従来と同じあり方でいいんだと。それは選択肢としてあるというふうに思います。

メディアというのは一度使ってしまったら、やはりそれは単なるテクノロジーの問題ではなくて、文化変容を起こすのだというふうに私は思っています。

それからもう一点、井上さんの指摘で、これは私もそうだろうと思うのですが、教団内の自由なネットワークの構築というのには必要だろうかということなのですけれども、ただこれもおそらくそう簡単にはいかないだろうというふうに私は理解しています。というのは、教団内での自由なネットワークの構築などというものがそもそも可能なかどうかということですね。宗教団体というのは自由な組織ではなく、不由な組織なのです。トップにいる方が「こうだ」と言ったら、

判断が合っているように間違っているように、もうそれでいくしかないわけで、民主的な組織ではないのだと思っているのです。だから、そういうときに自由な会話、自由な判断材料を提供したり話をする、もちろん領域やテーマによると思うのですが、そういうことが絶えずできるということは組織上教団のあり方として矛盾しているんじゃないかという気がするのです。その点で逆に組織内の下克上みたいなことが起っているんじゃないか。つまり、教団内での民主化の流れに沿って、従来ならば組織の中で上意下達で、基本的な方針が決まれば、多少不満があっても何しても、こうだといったものが、一方でこういった自由なコミュニケーションの場がある程度できると、そういう中で従来はある程度口コミでは不満があると思っていたのが、半ば公然と不満というのが出てくる可能性があって、それが組織のあり方自体を弱くする可能性があるのではないかと思うのが一つです。

インターネット上で現在神社のホームページを見ますと、特にアクセスカウンターの多い神社ですね。何回この神社にアクセスしたかというカウンターの出ている神社があるのです。その発表をこの間大学のゼミで学生から聞いたのですが、明らかにアクセスカウンターのほかの神社、特に著名な神社と比べて一桁多い神社があるのです。それらは、もちろん私は神社界をすべて知っているわけではありませんけれども、あま

り聞いたことのない神社なのですね。ホームページのつくり方なのですね。知名度の高い著名神社のアクセスカウントが必ずしも高いわけではない。地方にあって、全く無名な神社でも、あるつくり方、ある情報の流し方をする、あるグループにとっては非常に知名度の高い神社になり得るということです。どうも情報の中でこれまで神社界にある種あった秩序なり序列なりが壊れている。それがいいか悪いかという問題は私は論じませんが、そういう可能性があるという認識はもっておいた方がいいのではないかとというふうに思います。

茂木 ありがとうございます。

今井 三人目になりますと、二人に全部言われるというところで、また何を言ったらいいか。情報の内容で何を伝えるかという問題があると思うのですけれども、これを考えまして先ほどちょっと打ち合わせたとき、おまえ社報を持ってきて、ちょっと考えておけと言われました。神社の社報というのがありますね。例えば赤坂日枝神社の「山王」というのは、お祭りをメインテーマを掲げて、お祭りの日程表が下にびっしり書いてありまして、「お祭りがあるんだ」と伝える「お祭りを迎えて」という鈴木俊一有氏子崇敬会長が書いたもので、その下には「建設奉賛のお願いの件」とあります。もうこれでもかこれでもかと、お祭りはこうだとか、お祭りの奉賛者

はこれだけいるとか、非常にメッセージが明らかなのですね。阪本先生のコラムも一つ入っていて、メッセージを明らかにしているもので、これは非常にわかりやすい。社報としてはかにもわかりやすいものがあります。東京中央区に鉄砲洲稲荷という神社があるのをご存じだと思いますけれども、そこから出ている「生成通信」というのがあります。ちょっと今日は持ってきてこれなかったのですけれども、ものすごく個性の強い紙面です。活字のみで、写真は一枚も使わない。でも玄米を食べると元気になる、禁酒禁煙で、水をかぶって元気になるうと、このメッセージが非常にわかりやすいのですね。何を伝えるのかというのが非常にはっきりしている。それからだれに向かって発信するかというのは、「山王」の場合はもうこれは氏子さんとお祭り関係者というふうに限定されていると思うのですが。非常にはっきりしている。お祭り関係者というのは、この井上先生のレジュメに書いてある海外生活者であろうと、外国人労働者であろうと、とにかくお祭りに参加する希望というよりも、お祭りに興味がある人には全部わかるようにつくってある。それから「生成通信」の方は興味のある人というふうに徹底的に、だれに向かってというのがはっきりしている。

これは非常にわかりやすいのですけれども、やはり情報発信の中で中途半端な情報発信がある。今日ここに持ってきた

いくつかは非常にわかりやすく、例えばさっきの神道時事問題研究会は完全にレポートとして成立していますから、何を伝えるか、だれに向かって伝えるかはっきりしている。それから明治神宮の「代々木」も崇敬会の会員にご神徳を伝えるというのがはっきりしているのです。一方で情報発信の中で、例えばある神社では非常に分厚い冊子をつくって皆さんにお配りしている。もう二〇〇ページぐらいで、中に高度な論文が入っているのですけれども、果してその論文を崇敬者の皆さんに配って価値があるのだろうかというような情報発信をしているところもある。

そうすると情報発信で何を伝えるかという観点で見ると、教化としての情報を伝えるのか、それとも知識としての情報を伝えるのか、それから対象をだれにしているものなのか、対象をだれにしている教化なのかということがはっきりしないのがよく目につきます。現在、こうした社報は神社本庁に一五〇種ぐらいいきていますけれども、そういうのがぼつぼつと見受けられますし、鉄砲洲稲荷の「生成通信」のように非常にわかりやすい、わかりやすいけれどもとつきにくい、はつきり言って活字の使い方は気持ち悪くなるのですけれども、見慣れると見やすい、そういうものもあります。

さて、情報発信は何をしたらいいかということなのですけれども、この間、神社本庁の工藤新総長にお話をちょっと聞

く機会があったのですけれども、外国人に対しては平和の地で成り立ってきた神道という信仰を自信をもって語るべきだというのがあるのですね。そういうふうなことをおっしゃっている。「では、それを外国人に伝えるように若者にも伝えればいいのですか」と聞いたたら、「そのとおりである」と。お互いに神社に対して知識がない人たちの存在を認めて、そういう人たちに伝えていくことが必要でしょう。

昨日、イスラム教の本を買いました、読んでいたら、イスラムの人とうまくつき合う方法というのは、自分の生活の中の信仰を聞かれたときに、無宗教と言うのが一番危険だといえます。宗教をもっていると、神社神道であると言った場合は、その神道の内容をもしくは仏教者であればその立場を丁寧に説明できれば尊敬を受けられる。丁寧に説明できるといえるのは、この場合と同じように、自分自身に自信をもって成り立ちを知識としてとりあえず説明できる。現在、教化としての情報発信は個々の神職さんが行うかもしれないのですけれども、神社界としての情報発信とすると、とりあえず知識を自信をもって発信する必要があるのではないか、また知識をこういう中に盛り込んで、主張とともに発信していく必要があるのではないかというような観点をちょっとこれで感じました。

茂木 一応今までのところは、井上先生の基調講演を受け

てそれぞれの先生方の発表があつて、やり取りを通じて先生方のお考えをより明確にできた、こんなふうに私思っているのですが、そこでこれまでの話を受けて、一番最初に井上先生に提示していただいた問題を最後に、もう時間がありませんので、議論したいというふうに思います。

高度情報化社会ということで、やはり今までの伝統的な社会といひましようか、日本の社会全体がもう確実に変わってきている。そういう中で伝統を墨守する型の神社神道というものとの存在意義が問われているわけですが、最初、問題点の指摘として井上先生がおっしゃられました、神社というのは空間としては非常にオープンで開かれている。情報を一〇〇％発信していて、情報がたくさん出ているにもかかわらず、それは単なる風景で、風景以外のものではないというような言い方がありました。風景の意味がわからなくなっている社会になってきている。一方で神職さんの顔が見えないという話がありました。日本の人口は一億三〇〇〇万人に至ろうとするわけですが、神職は考えてみると二万人ちょっとしかないわけで、数そのものも少ないわけですが、非常に神秘のベールに包まれている。そういうことが悪いことなのか、いいことなのかわかりませんが、そういう状況があるというお話でした。

そういうところから、送り手の側のさまざまな神社が今ま

で問わず語りといひましようか、言葉を発しなくてもさまざまなものを通じてやってきたことが、これまでどおりいかなくなってきた社会の中にあつて、これからどうすればいいのかということをやはり最後に議論しなければいけないと思ひますので、その問題提起を受けて稲さんの方からいくつか具体的に提言がありました。課題として受けとめて、こういうふうにしたらいいいのではないかと、稲さんと今井さんにはぜひ神社界の内部からこうしたらいいんじゃないか、石井先生には外部からこうしたらいいんじゃないかと、具体的なお話をいただければありがたいと思ひているのですが、稲さんからお願いできますでしょうか。

稲 神社というものが開かれた空間としてあるけれども、そこから神職の顔が見えにくいということとは確かにあると思ひいます。そういう意味でも、これからの神職の養成、人材の育成が神社界の重要な課題ではないかと思ひます。ただ、それではどういう人材を養成していくのかということでは、確かに神社神道は宗教であるという観点に立てば、神道の神様に関するとか、信仰的なことを堂々と語れる神職の養成ということが一つの中心になってくるのではないかと思ひますが、現在の私の考え方としては、やはり神社神道というものは、人の養成が大切なことは当然ですが、神職と神社と

あった場合には、基本的には神社を全面的に出していくことがこれまでの神社神道の伝統でもあったし、これからもそうであると思います。もちろん神社神道は宗教に違いありません。ただ一つ、そういう人の観点でいった場合、例えば宗教者とか聖職者とか、そういう表現をしたときに、確かに神父さんや牧師さんやお坊さんなどは宗教者であり聖職者であることにそれぞれの当事者自身も納得すると思うのですけれども、神職の場合には、宗教者である、聖職者であると実際に言われたときに、何となくこそばゆい感じがする方もたくさんいるのではないかと思います。そこがある意味では神社神道がほかの宗教と違っての部分なのではないかと思えます。井上先生の問いかけに対して、いまの段階でははっきりと答えられませんが、もちろん人の養成はこれからの神社界の最大の課題ではあります。その中で、やはり神社が中心であるというこれまでの伝統をきちんと認識した神職を養成していくということがこれからの課題ではないかというふうに考えています。

茂木 ありがとうございます。では石井先生、お願いします。

石井 情報の発信の問題、あるいは人の問題でいいますと、伝統的に情報の発信ということを得意にしてこなかった。そういうタイプの宗教だったわけで、ここへきて急に何か言え

と言われても、難しいだろうというのは大変よくわかるのですね。ただ、やはり社会的な、あるいは時代的なニーズから考えて、やらなくてはいけないだろうというのもそうだと思うのですが、現状で見ていると、本当に情報を発信したいのかということを考えてみると、見ている側では必ずしもそこまでの強さというのを感じないですね。確かにもう社報なり、教化の材料とか、あるいはビデオとか、そうやって一生懸命探せばないわけではないという言い方をすると大変失礼なのですが、たくさんあるのですね。ただ、それらを本当にどこまで配って伝えたいのかということを考えて、ごく一般の日本人という認識をもっと、それは伝わってこないということだろうと思うのです。

それからもう一つは、外部から見えますと、神社界の内部での情報の共有の指向性というのが非常に弱いのではないかと思います。比較で仏教界を考えても、例えば「中外」、「仏教タイムズ」、あるいは月刊誌でも「月間住職」とか、質の問題はいろいろあると思いますが、「寺と生活」とか、あるいはほかにも、いろんな情報誌があって、それぞれ必要な情報が流れているような気がするわけです。キリスト教ですともっとたくさんあるわけですが、しかし神社界を見渡すとあまりそういう情報誌みたいなものがないような気がするのですね。月刊は「若木」、それから「神社新報」、もう

ほとんどその二つに限定されるわけです。これらは表立った情報であって、そういう点からいうとやはり見えにくい宗教界だなという印象が強いように思っています。

神社界、個々の神社、あるいは神社庁でいろいろなアイデアをもっていらっしゃる方というのは、個別に会ってみるとかなりいらっしゃるんですね。そういう情報がうまく共有できるようなシステムがおそらくこれから必要だろうし、そうする方も出てくるのかなという気はしています。そういう点ではまだまだ情報の問題というのはいろいろなレベルで論じられるべきだろうというふうに思います。

茂木 ありがとうございます。では今井さん、お願いします。

今井 また三人目で、何を言っているのか困るのですが。大体二つ言われてしまったので、最後に専門知の逆転現象という、先ほど井上先生がおっしゃられた問題なのですから、これを私なりに解釈してみても、合っているかどうかは、後で注意して戴きたいと思います。

上層部というのですか、一部が知っていて、他が知らなかった。それが高等教育の大衆化によって今まで知らなかった人たちが知るようになって、何だ、簡単なものなのかといって逆転現象を起こしていく。ところが神社界そのものは果してそういうふうな形態であったのだろうかという点です。頂点

にいるといったら失礼ですけども、本来知っているべき神職があまり知らなかったのではないか。例えばお祭りをするといっても、神主さんは出てきて、ピラピラッと白い紙を振っておけば、後は例えばおみこしを準備するのは何とかグループ、料理は何とかグループ、お掃除は何とかグループ、後片づけは何とかグループとかいて、パッとできてしまう。だから逆転現象ではなくて、みんなが何となくお祭りをやってきた。ところがそれが共同体の知識として欠けてきてしまったので、やむなく神職が専門知識をもたなければいけなくなってきた。

また例に出して失礼なのですが、私の奉仕している白鬚神社で、今までお神輿を飾るお神酒所というのは地域の長老が出てきて、パッパッと飾りつけをしていく。真ん中に掛け軸を並べて掛けて、前にお神酒徳利置いてというのとはさつと指示したのだけれども、長老が死んでいくと次に伝える人がいないので、できなくなる。そうすると「神主さん、ちょっと来てくれ」といって、私が呼ばれていって、ええと、一番初めは米だからと、米を供えようと、去年の写真と違うとか、そういうふうになされてしまう。しかし「おれは神主なんだから、そうやれ」と言ってしまうばそういくのですけれども、そうもいかない。そうすると、逆転現象なのか、それともみんな知っていて神職だけ知らなかったのか、何かそこに情報

のギャップみたいなものが出ています。

それをいま類推すると、石井先生がおっしゃったような、みんないい情報とか知識をもっているのだけれども、それを共有できないというのは、何かそれとつながる同じようなものがあると思うのです。一方で神社界は本来共有しなくていい団体だったのかもしれないのです。それは地域のお祭りでも、それぞれのグループの、例えば煮物をつくるグループとおみこしを縛るグループはその地域の共有というのは必要ないはずで、分かれていたのが、今たまたま共同体意識が崩壊してきて、知識を共有しなければならなくなっている。それと同様に神社界もやはり過渡期にきて、今まで私たちが私たちなりにその地域でやっていけば済んだことが済まなくなつて、新しい知識を入れなければいけないことになっている。それが果して入れなければいけないことなのか、入れたらいけないことなのかの判断をしなければいけない時期にきている。その新たな情報というのを仕入れていいか、いけないかというのを判断しなければいけない時期にきているというところ、今度は次に人の養成というのがきまして、神職のシンポジウムですと最後は必ず「神職の資質の問題です」と終わるのですが、今日はそれにならないようにシンポジウムを閉めたいと思うのです。

茂木 いま井さんがおっしゃったことは最初に稲さんが

おっしゃっていたことだと思うのですが、たくさん情報がある中で、逆に本当に生きるために必要な情報というか、人々の経験によって積み重ねられてきた情報がスпойルされていく。そういうふうには現実の社会が変わっているという中とにかく現状があるわけですね。そこでどうしようかということなのだろうと思うのです。神職の場合ですと、そういう伝統的なことだったらすべて神社に行つて聞きなさいと、そんなふうなのがおそらく地域社会の実情ではないかと思うのです。今まで家庭でごく普通にやってきたことまでも神職に聞かなければいけない。ですから逆に神職をどんどん専門化していく、専門知識人になれば神職が務まらないような状況もあるのではないかと一方で思うのですが、そのことは今日の議論とはちょっと離れていってしまします。

いま三人の先生方からお話があったわけですが、井上先生から最後に一言載いて、その後で、会場の方々でも是非お聞になりたいことがあるかと思ひます。最後に質問の時間を設けたいと思いますので、井上先生、お願いいたします。

井上 私はいつも突き放した言い方になってしまふのですが、ただ今回は結構話が煮詰まってきたような気がします。それと一言、テクノロジーの話で石井さんはアーミッシュの例を出しましたがそれだけでは反論にはならないと私は思います。

私の言いたいことは、どの神社でももう電話は使っているでしょう、ファックスも使っているでしょう、テレビも見ているでしょう、ということです。そういう面はどんどん変わるのです。そういうことを言いたいのであって、たまには例外的に反骨精神の旺盛な教団もあります。でも神社神道は別にそうではないと思うのです。時代とともに変わってきたと思います。だから変わると思います。

あとネットワーク云々と言いながら、最後は結局、人の情報の流れというところで同じことなのです。私はそれを言ったわけです。つまりネットワークが構築できるかといったけれども、最後は人が問題になっているのですが、私はむしろ神社神道というのはあまり統一的なグランドデザインではない方がいいと思っています。それで個性のある神職さんがいて、いろいろおもしろいことをやっている神社があって、要はもう少しそれがネットワークによって、情報化時代になることによってもう一ランク上のものになればいいというふうに個人的には思っています。上から命令がきて、こうしましょうと、たとえば神社新報の広報によって、みんなが動くことはかえって怖いというふうに思っています。いろんな方がいて、結構個人営業的にやっている。ひょっとしたらそれが逆に神社神道がここまで続いた理由かもしれないと思うのです。ただそれぞれやっているのがいま個人努力ではもうき

つくなっているわけです、この情報化時代には。一方でマスメディアを使ったりして大がかりに宣伝しているところがあるわけです。そうしたら、やはり神社神道は神社神道なりのネットワークで、いくつもネットワークができればいいと思うのです。それが大上段に人の養成とかいうと大変で、國學院大學の神道学科がどれだけその要請にこたえられるかどうか大変難しいところがあるのです。私が言いたいのは、そういう複数のネットワークの構築によって、とりあえず第一段階の関門におつかってみてはどうだろうかという意見です。

茂木　ありがとうございます。それでは、今まで三時間聞いておられてだいぶ疲れたのではないかと思います、何か先生方にご質問なり、ご意見がございましたら、ぜひ挙手をいただきたいと思います、いかがでしょうか。

(國學院大學学生)　私自身、実はひねた学生でして、元会社員で、定年退職する直前に神道学科の二部に入りまして、その途中で会社は定年になったのですが、おかげさまで今、大学の三年で学ばせて戴いております。

質問は、今井さんが最後におっしゃったと思うのですが、人といえば即神職ということと終わってしまったては困るんじゃないかということ、もう少し掘り下げて考えて戴きたいという気がします。それは、私一番最初に思ったのですが、井上先生のお話で、井上先生というのは少年時代に恐るべき神

童であったのではないかというお話を伺いました。私は、井上先生のお話を伺う前から、お祭りはやはり、おじいちゃん、おばあちゃんと小さい子供だというふうな実感を受けています。だから、小さいころ神社のお祭りを見た、聞いた、体験した、それはおじいちゃん、おばあちゃん、あるいは場合によったら地域の長老、親も含めてですけれども、教わったということだろうと思うのです。井上先生のお父さまは井上先生に大祓詞を一〇歳の年齢で暗唱させたということですが、先生のお父さまは神職でいらしたのか、たぶんそうではないんじゃないかという気がします。だから神社神道の人といえは神職というよりも、先ほど今井さんのお話にもちょっとありましたが、一々神職さんに教わらなくてもお神酒所の飾りつけがきちっとできてしまうという人が地域に必ずいたと思うのですね。そういう人たちがいなくなってしまうており、減ってきてしまっているのをどうやって戻すかということが一つだと思います。それとその前に、井上先生のお父さまは神職だったのかどうか、そこから一つお願いします。

茂木 では井上先生に先ずお答えいただきたいのですが。

井上 神職ではありません。

茂木 では今井さん、お願いします。

今井 人といえば即神職と言ったのは、ちょっと私が言い足りないかったです。人といえば神職の資質ということに行

き着いてしまうと言ったつもりだったのですが。神社界のシンポジウムをやりまして、最後になりますと、「結局神職の資質の問題ですから、我々自身が研究に励んで、斯界のこのために努力したいと思います」ということで、大体シンポジウムは「そうですね」と言って終わっていくのが八割の通例ですけれども、今日はそれをやめましょうというつもりで、人といえは神職の資質ということはやめにしたいものだというつもりで言ったのです。

茂木 最後にいい質問がありまして、そのとおりだと思うのですね。さっき私も申し上げたのですけれども、どうしても地域社会で社会構造が変わってきましたので、地域の人たちが本当に伝統的な知識を身につける場がなくなってしまうて、結局神社に始まる神職がそのかわりをしなければならなくなってしまうています。やはりこれは本当に危機だと思うのです。みんなが、社会全体がそういう知識を持ち合わせて、つくり上げていくのが本当の地域社会だと思うのですけれども、どうもそうではなくて、お祭りのたびに全部を神主さんのところにいろいろ聞きにいかなければならないようなことになってしまふ。参加はだれでもできるわけですけれども、つくり上げていくのが非常に大変な社会になってきた。そういう現状の中でどうすればいいかというのが今日のテーマだと思うのです。そういう中でどういう情報を発信していけば

いいのか、見えてきたような気がします。最初の井上先生のご発題からいろいろ議論を重ねてきました。必ずしもうまくいったかどうかわかりませんが、問題の所在は明らかになってきたのではないかなというふうに思います。ぜひこういう機会をたくさんもちながら、神道文化会としましても神社神道のあるべき姿を模索、確立していきたいというふうに思っています。

時間も過ぎましたので。長時間にわたってお聞き戴きました。本当に今日はありがとうございました。これで今回の講演会、シンポジウムを終わらせて戴きます。どうもありがとうございました。

